

経済・金融 フラッシュ

貿易統計 11年6月

～4-6 月期の外需寄与度は前期比▲0.7%
程度のマイナスに

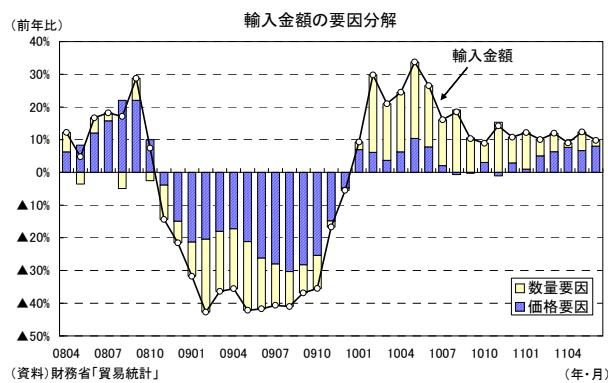
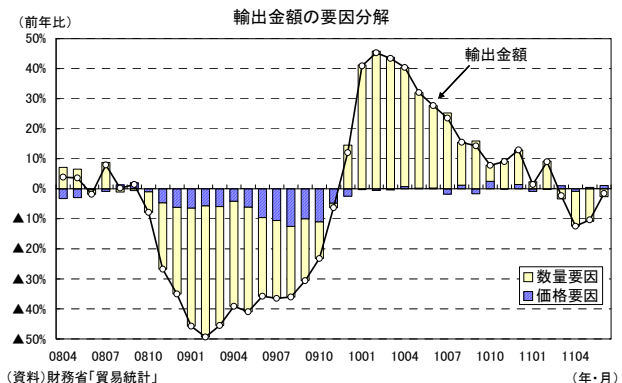
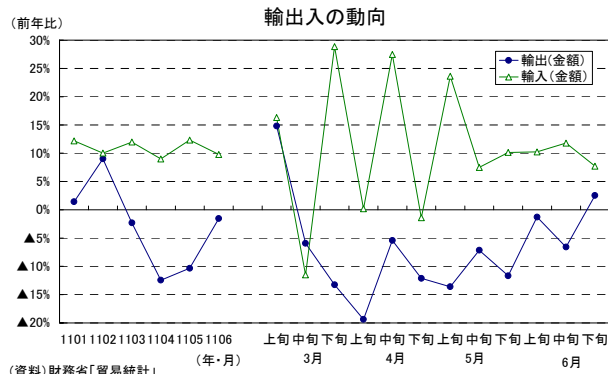
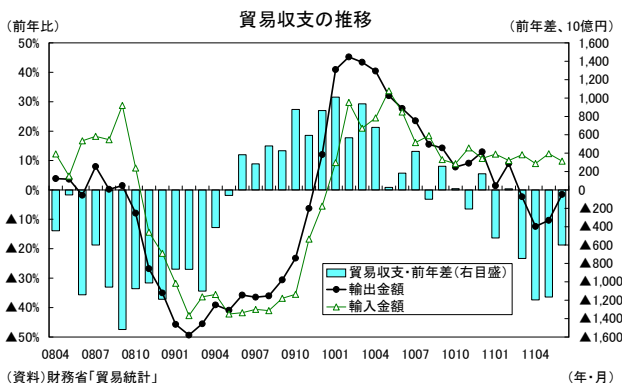
経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 貿易収支は原数値では3ヵ月ぶりの黒字だが、季節調整値では3ヵ月連続の赤字

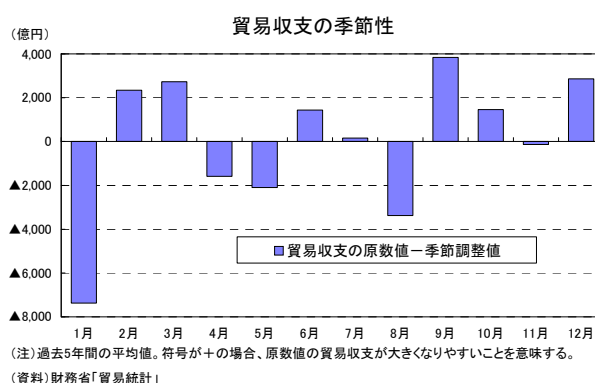
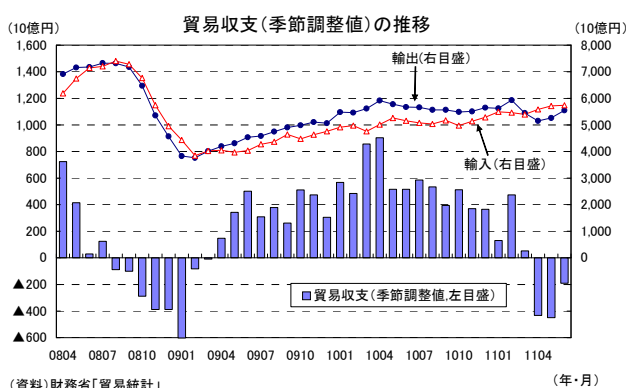
財務省が7月21日に公表した貿易統計によると、6月の貿易収支は707億円の黒字となった。貿易黒字は3ヵ月ぶり、事前の市場予想（QUICK集計：▲1,482億円、当社予想は▲1,753億円）を上回る結果であった。サプライチェーンの復旧に伴う国内生産の持ち直しを主因として輸出が前年比▲1.6%と前月の同▲10.3%から減少幅が大きく縮小する一方、輸入は前年比9.8%（5月：同12.3%）と前月から伸びが鈍化した。

6月の輸出入を旬別に分けてみると、輸出は上旬：前年比▲1.3%→中旬：同▲6.6%→下旬：同2.5%となった。旬ベースの輸出がプラスとなったのは3月上旬以来であり、輸出の回復傾向が鮮明となっている。輸入は上旬：前年比10.2%→中旬：同11.8%→下旬：同7.7%となった。



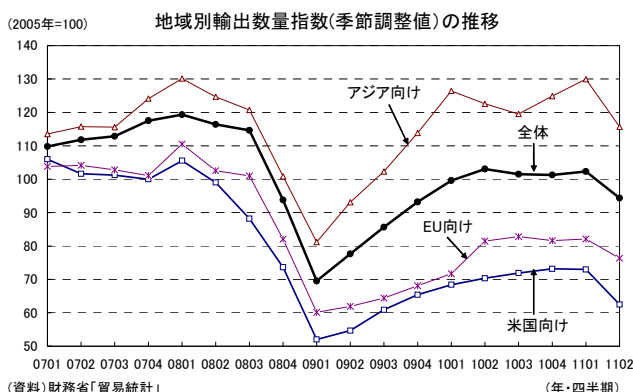
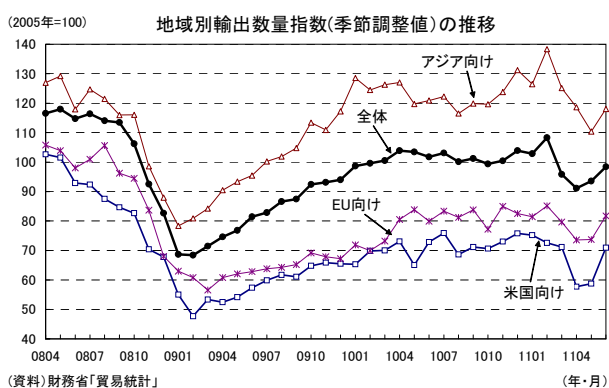
輸出の内訳を数量、価格に分けてみると、輸出数量が前年比▲2.6%（5月：同▲10.8%）、輸出価格が前年比1.1%（5月：同0.5%）であった。輸入の内訳は、輸入数量が前年比1.7%（5月：同5.5%）、輸入価格が前年比8.0%（5月：同6.5%）であった。

貿易収支は原数値では黒字となったものの、貿易収支には季節性があるため、基調を判断するためには季節調整値を用いることが適切である。過去のデータを用いて貿易収支の季節性を見てみると、4月、5月は原数値の貿易収支が赤字になりやすく、6月は黒字になりやすい月であることが分かる。6月の貿易収支を季節調整値で見ると、▲1,912億円（5月は▲4,500億円の赤字）と3ヵ月連続の赤字となっている。貿易収支の赤字幅は縮小したものの、6月の時点で貿易収支が赤字を脱したとは言えない。



2. 7月以降は貿易収支の改善ペースがいったん鈍化する可能性

6月の輸出数量指数を地域別に見ると、米国向けが前年比▲2.5%（5月：同▲9.9%）、EU向けが前年比2.2%（5月：同▲12.3%）、アジア向けが前年比▲2.4%（5月：同▲7.9%）であった。季節調整値（当研究所による試算値）では、米国向けが前月比20.8%、EU向けが同10.9%、アジア向けが同6.9%、全体では同5.2%となった。



4-6月期の輸出数量指数を季節調整値（当研究所による試算値）で見ると、米国向けが前期比▲14.4%（1-3月期：同▲0.3%）、EU向けが前期比▲7.0%（1-3月期：同0.6%）、アジア向けが前期比▲11.0%（1-3月期：同4.1%）全体では前期比▲7.8%（1-3月期：同1.1%）となった。5

月、6月は比較的高い伸びとなったが、3月、4月の落ち込みが急激であったため、4-6月期を通して見ると1-3月期に比べ大きく落ち込む形となった。

一方、輸入数量指数（季節調整値）は、6月が前月比▲1.8%（5月：同1.1%）%、4-6月期は前期比▲1.3%（1-3月期：同3.4%）と2四半期ぶりに低下したが、輸出に比べると落ち込みは小幅にとどまった。

鉱工業生産は3月には前月比▲15.5%と過去最大の落ち込みを記録したが、4月に同1.6%と増加に転じた後、5月は同6.2%と伸びをさらに高めた。企業の生産計画を表す製造工業生産予測指数は、6月が前月比5.3%、7月が同0.5%と引き続き増加が見込まれているが、7月の伸びはそれまでに比べると大きく鈍化している。当研究所では、鉱工業生産は6月までは高い伸びとなるものの、電力不足の影響から夏場（7月以降）には低迷し、これに伴い輸出も伸び悩むと予想している。

一方、輸入は国内生産の落ち込みを補うための代替輸入、復興需要のための資材調達、火力発電所の再開、増強に伴う鉱物性燃料（原油、液化天然ガス等）の需要増などから、増加基調が続くことが見込まれる。

6月の貿易赤字（季節調整値）は前月から大きく縮小したが、7月以降は改善ペースがいったん鈍化する可能性が高い。7-9月期の貿易収支はゼロ近傍で一進一退の動きが続くことが予想される。

3. 4-6月期の外需寄与度は前期比▲0.7%程度のマイナスに

6月までの貿易統計と5月までの国際収支統計の結果を踏まえて、4-6月期の実質GDPベースの財貨・サービスの輸出入を試算すると、輸出は前期比▲5%程度、輸入は前期比▲1%程度の減少となることが見込まれる。この結果、4-6月期の外需寄与度は前期比▲0.7%程度（1-3月期は同▲0.2%）となり、成長率を大きく押し下げることになるだろう。

当研究所では7/29に発表される6月の鉱工業生産、家計調査等の結果を受けて、同日のweeklyエコノミストレーダーで4-6月期の実質GDP成長率の予測を公表する予定である。経済活動はすでに持ち直しの動きがはっきりとしているが、3月の落ち込みが極めて大きかったことが響いて、4-6月期は3四半期連続のマイナス成長が不可避と考えられる。

（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。